



**JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1**  
**JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1**  
**JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1**

Monday 10 May 2004 (afternoon)  
Lundi 10 mai 2004 (après-midi)  
Lunes 10 de mayo de 2004 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

---

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の1 (a) の文章と1 (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。  
(コメントリーを書きなさい)

1. (a)

5 初めの間は私は私の家の主人が狂人ではないのかとときどき思った。観察している  
とまだ三つにもならない彼の子供が彼を嫌がるからと言って、親父を嫌がる法がある  
かと言って怒っている。畳の上をよちよち歩いてその子供がぱったり倒れると、  
いきなり自分の細君を殴りつけながらお前が番をしていて子供を倒すと言うことがあ  
10 るかと言う。見ているとまるで喜劇だが本人がそれで正気だから、反対にこれは狂人  
ではないのかと思うのだ。少し子供が泣きやむともう直ぐ子供を抱きかかえて部屋  
の中を駆け廻っている四十男。この主人はそんなに子供のことばかりにかけてそうか  
15 と言うとそうではなく、およそ何事にでもそれ程な無邪気さを持っているので自然に細  
君がこの家の中心になって来ているのだ。家の中の運転が細君を中心にして来ると細  
君系の人々がそれだけのびのびとなって来るのもっともな事なのだ。従ってどちら  
かという主人の方に関係のある私は、この家の仕事のうちで一番人のいやがること  
ばかりを引き受けねばならぬ結果になっていく。いやな仕事、それは全くいやな仕事  
で、しかもそのいやな部分を誰か一人がいつもしていなければ家全体の生活が廻らぬ  
20 という中心的な部分に私がいるので、実は家の中心が細君ではなく私にあるのだが、  
そんなことを言っただけでいやな仕事をする奴は使い道のない奴だからこそだとばかり  
思っている人間の集りだから、黙っているより仕方がないと思っていた。全く使い道  
のない人間と言うものは誰にも出来かねる箇所だけに不思議に使い道のあるもので、  
このネームプレート製造所でもいろいろな薬品を使用せねばならぬ仕事の中で私の仕  
事だけは特に劇薬ばかりで満ちていて、わざわざ使い道のない人間を落とし込む穴のよ  
うに出来上っているのである。

(中 略)

25 ある日私は仕事場で仕事をしていると主婦が来て主人が地金を買いに行くのだから  
私も一緒について行って主人の金銭を絶えず私が持っていてくれるようにと言う。そ  
れは主人は金銭を持つとほとんど必ず途中で落してしまうので主婦の気遣いは主人に  
金銭を渡さぬことが第一であったのだ。いままでのこの家の悲劇の大部分も実にこの  
30 馬鹿げたことばかりなんだがそれにしてもどうしてこんなにこの主人は金銭を落す  
のか誰にも分らない。落してしまったものはいくら叱ったって嚇したって返って来る  
ものでもなし、それだからって汗水たらして皆が働いたものを一人の神経の弛みのた  
めことごとく水の泡にされてしまってそのまま泣き寝入に黙っているわけにもいかず、  
それが一度や二度ならともかく始終持ったら落すと言うことの方が確実だと言うの  
35 から、この家の活動も自然に鍛練のされ方が普通の家とはどこか違って成長して来て  
いるに違いないのだ。いったい私達は金銭を持ったら落すという四十男をそんなに想

像することは出来ない。たとえば財布を細君が紐でしっかり首から懐へ吊しておいて  
 もそれでも中の金銭だけはちゃんといつも落してあると言うのであるが、それなら主  
 35 人は金を財布から出すときか入れる時かに落すにちがいないとしてみても、それにし  
 ても第一そう度々落す以上は今度は落すかもしれぬからと三度に一度は出すときや入  
 れるときに気付く筈だ。それを気付けば事実はそんなにも落さないのではないかと思  
 われて考えようによってはこれはあるいは金銭の支払いを延ばすための細君の手では  
 ないかとも一度は思うが、しかも間もなくあまりに変っている主人の挙動のために細  
 40 君の宣伝もいつの間にか事実だと思ってしまうねばならぬほど、とにかく、主人は変  
 っている。金を金とも思わぬと言う言葉は富者に対する形容だがこの主人の貧しさ  
 は五銭の白銅を握って銭湯の暖簾をくぐる程度に拘らず、困っているものには自分の  
 家の地金を買う金銭まで遣ってしまっていて忘れていた。こう言うのをこそ昔は仙人と言  
 ったのであろう。しかし、仙人と一緒にいるものは絶えずはらはらして生きていかね  
 45 ばならぬのだ。家のことを何一つ任しておけないばかりではない、一人で済ませる用  
 事も二人がかりで出かけたり、その一人のいるために周囲の者の労力がどれほど無駄  
 に費されているか分らぬのだが、しかしそれはそうにちがいないとしてもこの主人の  
 いるいないによって得意先のこの家に対する人気の相異は格段の変化を生じて来る。  
 50 恐らくこの家は主人の為に人から憎まれたことがないに違はなく主人を縛る細君の  
 縛りがたとい悪評を立てたところ、そんなにも好人物の主人が細君に縛られ  
 て小さく忍んでいる様子というものはまた自然に滑稽な風味があつて喜ばれ勝ちなも  
 のでもあり、その細君の睨みの留守に脱兎の如く脱け出してはすっかり金銭を振り撒  
 いて帰って来る男と言うのもこれまた一層の人気を立てる材料になるばかりなのだ。  
 そんな風に考えるとこの家の中心は矢張り細君にもなく私や軽部にもない自ら主人  
 55 にあると言わねばならなくなつて来て私の傭人根性が丸出しになり出すのだが、どこ  
 から見たって主人が私には好きなんだから仕様がな。

(横光利一『機械』、一九三〇年)

(注) 横光利一(一八九八—一九四七)……小説家。代表作に『蠅』『上海』  
『旅愁』などがある。

地金……メッキの下地や、加工の材料となる金属。ここではネームプ  
ルトの原料。

五銭の白銅……銀白色の五銭硬貨。

軽部……製造所で働く「私」の同僚の名。

1.  
(b)

言葉

これ以上たどれない。  
暗い森はいたるところにある。  
本当のことをいうためには  
しかし  
5 何かを殺さねばならぬ。  
言葉は死なねばならぬ。  
本当のことをいえば  
私は言葉を信じていない。  
崖から石を落すように  
10 言葉は落すしかない。  
言葉が落ちる  
崖の下には  
きまって森がある。  
これ以上たどれない  
15 のではなくて  
これっぽっちも  
たどれていないのだが。  
言葉の行方<sup>ゆくえ</sup>はつきとめなければならぬ。  
枝折って  
20 指折って  
森のなかを  
くまなく探さねばならぬ。

(注) 安水稔和<sup>あみずのりかず</sup> (一九三二―) …… 詩人。代表作に「愛するとは」、  
「飛ぶ意志」などがある。